

# 夏目漱石『行人』論

——愛とエゴイズム——

吉田 明日香

## はじめに（序章）

夏目漱石の『行人』は、一九一二年二月六日から翌年一月五日まで「朝日新聞」で連載された長編小説である。

長野家の長男で大学教授の一郎は、妻である直のスピリットを掴めずに苦悶し続けるのだが、一郎自身は直のことを愛していたかは明確には描かれていない。また直の本心もはっきりと描かれていない。本論文は、直が一郎を愛していたのか、一郎は直を愛していたのかを検証するため、直の方面と、一郎の方面から本文の順序に沿って考察を進めていく。また、一郎の思う愛はどのようなものだったのか明らかにしたい。そして、一郎は果たしてどうなるのかを考えていきたい。考察の方法上、重複する場面が見られることを最初に断わっておく。

## 第一章 直の態度

本文中の直の言動のわかる箇所を抜き出し、直の態度を考察していく。直の立ち位置を見るために他の人物に関しても少し考察する。直が一郎や二郎をどのように思っていたのかを明らかにしていきたい。

### 第一節 「兄」における直の態度

ここでは「兄」における直の態度についてわかる箇所を抜き出し考察していく。此処で言う「く章」というのは「兄く章」という意味である。

十三章で二郎たちは泊まっている宿の下の土手を散歩する。母と二郎よりも兄夫婦は先を並んで歩いていたのだが二人の間には「これこれ一間の距離」があり、一郎と直に身体的な距離がみられる。

十四章で、二郎は「腹の立つ程の冷淡さを嫁入後の彼女に見出した事が時々あった。」と述べる。「嫁入後」ということは嫁入り前から比べると直が冷淡になっており、嫁入によって直が変わってしまったことを示す。

十五章で、宿に泊まって寝床につく場面がある。兄夫婦の部屋は「沈黙に鎖されて」いる。「ただ防波堤に当って碎ける浪の音のみが、どどんどどんと何時までも響いた。」というように、兄夫婦の部屋はずっと静かだったのである。ここから、兄夫婦には会話が極端に少ないことが考えられる。

十六章で、二郎と直は和歌山に出かけることになる。二郎が直に出かける「勇気がありますか」と聞くが、直は自分の答えを言わ

ず「あなたは」と返す。二郎があると答えると、「貴方であれば、妾にだつてあるわ」というふうには、まず人（男性）の意見を聞いてから、それに従うように答えている。これに似た箇所が数か所見られるので、これは直なりに男性を立てていると考えられる。また、二郎に上着を引掛けるなど人並みに気のきく女性である。二郎は直に調戯われていると感じる。直が二郎を調戯うのは、二郎に親しみを感じているからであると考えられる。

二十八章で直と二郎は電車に並んで腰を掛けている。二郎は直の心を探らなければならなかったために機嫌よく話ができない。それに対して直は何故そんなに黙っているのかと言う。宿を出てから二度この質問を投げかけられた二郎は、直が「二人でもっと面白く」話したいと思つていてと考える。ここから直は二郎と話す意思があることがわかる。また二郎が、一郎と直の寢室が静かだった（兄十五、兄二十三）ということから、直にとつては夫である一郎よりも二郎のほうが話しやすいということが考えられる。

二十九章で直と二郎は料理屋で、下女に風呂の案内をされる。二郎は明るいうちに帰りがたつたために、風呂の時間が惜しかった。二郎は直に風呂はどうするか尋ねる。直も明るいうちには帰るよう一郎から言いつけられていたために、そこはよく承知していた。直は時計を見てまだ早いから風呂に入っても大丈夫だと言う。直は時間の遅く見えるのを天気の良いにしていた。直は理由をつけて二郎を引きとめようとしている。兄からの云いつけがあつたにも関わらず二郎を引きとめるのは、母や一郎のもとに帰りたいくないからである。

三十章で、二郎が雨を気にするのを見て直は不思議そうに、何故

そんなに雨が気になるのかと尋ねる。二郎が雨がいつやむか解らないから困るという、「いくら約束があつたつて、御天氣のせいなら仕方ないんだから」という。直は天気の良い訳にして、夫である一郎との約束より二郎と一緒にいる時間を優先している。本当に夫のことを思うなら約束を守ろうとするはずである。直は二郎とのこの旅行を楽しんでいるのではないだろうか。もっと楽しい話をしようという態度（兄二十八）からもそれが伺える。「自然の醸した恋愛」とまでいかなくとも、一郎と直よりも二郎と直のほうが相性がよく

自然な関係を築けるのかもしれない。三十一章で二郎が直に「兄さんにだけはもう少し気をつけて親切にして上げて下さい」というと、直は「できるだけの事は兄さんにして上げてやるつもり」と言う。それでも二郎が再び同じことを言うと、直は拮据になつてしまつたら無理という。二郎に積極的になれと言われると、「積極的つてどうするの」と直は言う。どうするのというように、直は一郎にどう接すればよいのか分からないのである。そして涙を流す。接し方がわからずとも一郎に対してできることをしてきた直。不満も言つていなかったのにも関わらず、それを二郎に理解されていなかったことに對して悲しんでいる。一郎との不和からか、母や重からの風当たりがよくないので直の理解者たりえるものは少ない。直は一通り一郎にできることはしてきたので、これ以上の夫婦仲の改善は難しいことを暗示している。母が直に対して不平を洩らしたり、それに対して二郎も多少同感するところから、女が夫に対してあれこれするのが当り前というのが常識のようである。直は自分のことを馬鹿と言つており、卑屈になつてゐる。また直が自分のことを「魂の抜殻」と表現している。直が家庭で抑圧されて主体性のなくなつてしまつ

たことを示す。この例えは、一郎は魂と魂の交流を求めているので、既に一郎と直の魂同士の交流への道は閉ざされているという暗示である。

三十二章で二郎が直に、一郎のことは好きなのか、それとも嫌いなのかと聞く。直は一郎以外に好いている男がいると思つているのかと反論し、腑抜けだから冷淡に見えるのだろう、それは自覚しているという。そして自分は親切だと褒められることもあると言ひ、二郎のクツションに刺繍をした話を持ち出す。二郎はそれに反論できないのである。ここで直は一郎のことから話題をすりかえている。前の場面でもみられるが、直は二郎のことを詮索されたくないのである。

三十五章で、泊まっている宿の電灯が消えて真つ暗になる場面がある。二郎は直がその場にいるのか確かめたくなり直の名前を呼び、「いるんですか」と尋ねる。それに対して直は「いるわあなた。人間ですもの。嘘だと思ふならここへ来て手で障つて御覧なさい」と言ひ、二郎は「手搜りに搜り寄つて見たい」と思う。また、直は暗闇を利用して着替えようとし帯を解く。直の言動は、二郎が家族だとしても結婚している女性としては問題がある。直が二郎のことを特別意識していないから出来る言動であるが着替えたり、接触しようとしたりすることは、性的な印象をあたえる。二郎が手搜りに搜り寄つて見たいと思うのは、嫂と義弟の關係では普通は抱かない感情である。十三章で直と一郎は一定の距離を空けて歩いていたのに対し、この場面での直と二郎の距離は近い。

三十七章で直は二郎に自分の死について語る。「妾死ぬなら首を縊つたり咽喉を突いたり、そんな小刀細工をするのは嫌よ。大水

に攫われるとか、雷火に打たれるとか、猛烈で一息な死に方がしたいんですもの」と言う。直は真剣にこの死に方を考えていて、「嘘だと思ふならこれから二人で和歌の浦へ行って浪でも海嘯でも構わない、いっしょに飛び込んで御目にかけますよか」とまで言う。波や津波と一緒に飛び込むというのは心中ともとれる表現である。直が二郎と心中をしたいとは本気で思つてはいないだろうが、真剣に話す直の気持ちは以前よりも二郎に接近しているようである。

三十八章では、直と二郎の間にこのような会話がある。

「姉さんが死ぬなんて事を云い出したのは今夜始めてですなね」

「ええ口へ出したのは今夜が初めてかも知れなくてよ。けれども死ぬ事は、死ぬ事だけはどうしたつて心の中で忘れた日はありやしないわ。だから嘘だと思ふなら、和歌の浦まで伴れて行つてちょうだい。きつと浪の中へ飛込んで死んで見せるから」

直は二郎より自分が落ち着いていると主張し、それはいつでも死ぬ覚悟ができていふからだと言ふ。今の直は「魂の抜殻」になつてしまふ本来の自分を出す事が出来ない。そのためいつ死んでも構わないと思つていふのだろう。死ぬことだけは忘れたことがない直は、家庭において苦痛を味わつていふ。

## 第二節 「帰つてから」における直の態度

引き続き、本文から考察を進める。

一章では、東京に帰るために二郎たちは寝台列車に乗ることにな

る。寝台四つで一室になっており、一郎と二郎は体力の優秀な男子というわけで上のベッドに寝ることになった。そして母と直は下のベッドに寝る。二郎の下に直、一郎の下に母が寝ることになった。寝台での四人の身体的距離をみる。二郎と直、一郎と直でみると、二郎と直のほうが圧倒的に身体距離が近い。二郎が直に同情するようになり、直は二郎に以前よりも親しみを寄せているからなのではないかと考えられる。また、二郎と母の身体距離が遠いのは、母が二郎と直の仲を疑い始めたからだと推測される。この時点で長野家の関係性の変化がみられる。

七章では舞台は長野家の食卓で、貞の結婚を話題にしている。貞は恥ずかしがって逃げるように席を外す。母は事情を知らないために不思議がる。すると一郎は母にこう告げる。

「なに二郎がね。お貞さんの顔さえ見ればおめでどうだの嬉しい事がありそうなのって、いろいろの事を云うから、向うでも恥かしがるんです。今も二階で顔を赤くさせればかりのところだもんだから、すぐ逃げ出したんです。お貞さんは生れつきからして直とはまるで違ってるんだから、こつちでもそのつもりで注意して取り扱ってやらないといけません……」

(略)もう食事を済ましていた嫂は、わざと自分の顔を見て変な眼遣をした。それが自分には一種の相図のごとく見えた。自分には父から評された通りだいな堂摺連の傾きを持っていたが、この時は父や母に憚って、嫂の相図を返す気は毫も起らなかった。

嫂は無言のまますっと立った、室の出口でちよつと振り返っ

て芳江を手招きした。芳江もすぐ立った。

そうして直は芳江を連れて廊下の外に出て行ってしまふ。一郎は遠くの方を眺めるが、眉が八の字になっていた。それからしばらく後に一郎が席を立ち書齋に行く。二郎はこのような光景をしばしば目撃していた。この場面では一郎が貞と直を比較していて、それに対して直は嫉妬したのではないだろうか。直は一郎に対して負の感情を抱き、二郎になんとかしてほしいと思ひ目配せをするが二郎は何もせず、直は失望し食卓を出て行く。直は旅行の前から二郎をからかったりしていたので、その態度を変えていない。しかし二郎は兄や母に直との仲を疑われていることを自覚しており、和歌山の出来ごとから直のことを意識するようになった。それゆえ兄や家族の手前、直に対して今まで通りの対応が出来なくなってしまった。直はいままで家族では二郎に対して気楽に接することが出来たのに、二郎の態度が変わってしまったので面白くないと思っているのである。また、心の抛り所となりえる二郎の態度が変化し、悲しく思っていることも推測される。そして、家族たちと距離を開けようとする。このようなことがしばしば食卓で起きていたとすると、直と一郎のコミュニケーションは前よりも少なくなっていると推測される。また、直と他の家族のコミュニケーションも少なくなっていることが推測される。直と一郎のどちらも部屋を出て行くので、互いに互いを回避している。二郎が言ったように「同じ型に出来上がった夫婦」なのかもしれないのである。二人ともどちらかという受身であり、夫婦間の問題に正面から向き合っておらずに逃げていく。直は二郎との旅行先で腑抜けになってしまったと言っていたので、一

・朗に正面から向かつていく気力がないのではないかと推測される。結末は描かれていないがこのまま行くと夫婦生活は破綻を迎えることを予感させる。

二十八章では直が一郎の平生着をもって、芳江の手を引いて階段を上ってくる。直は一郎の顔を見るのだが、一郎に対して何も言わない。ここで、直の一郎に対する態度に変化が見える。直は一郎の部屋を出ていくときに、二郎に「一面識もない眼下のものに挨拶でもするように、ちよつと頭を下げて」黙礼をする。それを二郎は直からこのような冷淡な挨拶を受けるのも珍らしいと感じる。直の二郎への態度の変化は、おそらく一郎の目の前であるので二郎との仲を疑われないようにという配慮である。自分から積極的に関係の改善をしようとはあまりしないものの関係が悪化しないように、直は以前よりも一郎に気を遣うようになったと言えるのではないだろうか。

三十四章では、兄が貞に話があると云って、兄が部屋を出ていく場面がある。そのときの直の唇には「冷笑の影が閃く」。これは直が一郎を蔑んでいるからだろう。一郎が直の気持ちを疑っているのに、疑われている直の気持ちも考えず貞と二人きりになるという身勝手な行動をとる一郎。一郎が貞と話している間、直は「尋常のものより機嫌よく話したり笑ったり」していたが、二郎の目には「不機嫌を蔵そうとする不自然の努力」というふうに見えるのである。これは直が一郎を冷笑し蔑みながらも、苛立ちを隠せていないからである。

### 第三節 「塵勞」における直の態度

引き続き「塵勞」における直について考察する。

二章では、直が突然二郎の下宿を訪れる。二郎は直を家に上げて、直の前に座布団を差し出す。直は「そうお客扱いにしちや厭よ」と言う。直は二郎に距離を置かれていると感じている。また距離を置かれたくなく、距離を置かれることを淋しいと感じているために片脛に平生と違った意味の淋しさをみせるのである。直は二郎に番町に来てほしいと思っており、以前のような関係、もしくは少し進んだ関係になりたいのである。

四章では、最初直に火鉢にあたれと言われ躊躇した二郎が火鉢にあたっており、直と二郎は向かい合わせになっている。直は前かがみになっており、それを二郎は近づきすぎると考えたために後ろへ振り返ることになる。この状態が二郎と直の現在の関係を表していると考えられる。直は二郎の下宿に来てから、二郎に対してどうして家にこないのか、態度が改まって淋しいというようなことを暗に告げている。直は積極的に出ている。それに対して二郎は火鉢にあたるのを最初ためらい、返答をはぐらかす。どうして直が下宿先に来たのだろうかなどと不安になる。二郎はどちらかという引きの姿勢である。この状況の中で直は二郎に、一郎との関係は二郎が家を出た後も好くない一方に進んで行くだけであるという告白をする。今まで直は、二郎が問いかけなければ一郎のことについて決して口を開かず返答をはぐらかしていた。しかし今の直は一郎との関係について積極的に二郎に対して吐きかけている。これは直の大きな変化である。直は一郎との不和を運命だと思ひ諦め受け入れる。直の「他の運命も畏れない」というのは、一郎の運命も畏れないということである。一郎がどうなろうとそれも運命だから仕方ないという

考え方である。もしも直が一郎を心から愛しているなら、家のものに苦痛を訴えていた一郎を助けたいと思うはずである。一郎と夫婦であるのに直は醒めている。そして、男は嫌になればどこへでも行けるが、女はそうはいかない。直は自分のことを「親の手で植付けられた鉢植」にたとえ、「一遍植えられたが最後、誰か来て動かしてくれない以上、とても動けや」しない、「じっとしているだけ」で、「立枯になるまでじっとしているよりほかに仕方がない」と一郎に訴える。「一遍植えられたが最後、誰か来て動かしてくれない以上、とても動けやしません。」というのは一度結婚すると女は自分から離縁ができないということを暗に訴えているようである。「誰か来て動かしてくれない以上」というのは、運命なら畏れないという態度を見せながらも誰かに動かしてほしいという願望があらわれている。誰にも打ち明けられない苦痛の告白をし、だれかに動かしてほしいことを暗に告げる直は二郎に救いを求めており、二郎との精神的なつながりを望んでいるのだと考えられる。直と一郎との情緒的な繋がりがもう望めないということが暗示されている。

二十五章で二郎は久しぶりに長野家を訪れる。二郎は直を見て、直が下宿を訪れたときよりも少しやつれていると感じる。二郎が一郎の旅行を延ばさなかったことに言及すると、直は延ばしはしないと言う。そしてこう続ける。

「兄さんは妾に愛想を尽かしているのよ」

「愛想づかしに旅行したというんですか」

「いいえ、愛想を尽かしてしまつたから、それで旅行に出かけたというのよ。つまり妾を妻と思つていらつしやらないのよ」

「だから……」

「だから妾の事なんかどうでも構わないのよ。だから旅に出かけたのよ」

嫂はこれで黙ってしまった。自分も何とも云わなかつた。

Hさんの手紙の中で一郎が直に手を加えたと述べる箇所があり、この時点で一郎は直に暴力を振るつていたことになる。また暴力が日常化していたと指摘する論文もある。直は一郎から暴力を受けて疲弊している。直は以前、一郎の腹の中はちよつとわからない(見出し)と言っていたが、暴力を受けることにより一郎の直に対する感情の直なりの答えが出たようである。

二十七章は家族で食事を済ませた後、重が二郎の見合い相手の話をし、話題はそれで持ちきりになるという場面である。直は同じ席にいたものの二郎の見合いに関して殆ど口を開かなかつた。二郎にはそれが直が「局外者らしい位置を守るため」という風に見えた。直はこれ以上二郎との問題を拗らせたくなく、自らの保身を選ぶ。一郎との精神的繋がりは望めず、二郎にそれを求めた直。しかし二郎ともそのような関係は築けず、直の心は満たされない。「誰か来て動かしてくれない以上」、「立枯れになるまでじっと」しているしかない直は、これからも魂の抜殻として生きていくことになるだろう。

## 第二章 一郎の態度

第一章での直の考察を通して、直は一郎を愛していなかつたことが明らかになつたが、直のスピリットを掴まずにはいられない一郎は果たして直を愛していたのだろうか。

## 第一節 「兄」における一郎の態度

第一章での直の考察と同じ方法で、一郎の思いを明らかにしていく。

十八章で、一郎は直が二郎に惚れているのではないかと言う。そして二郎を正直な父の遺伝を受けており、「何事も隠さないうという主義を最高のものとしている」と評し、直について思うところを聞きだそうとする。一郎は父も二郎も正直者だと思っているのである。二十章で、一郎はメレジスの話をする。

「その人の書翰の一つのうちに彼はこんな事を云っている。——自分は女の容貌に満足する人を見ると羨ましい。女の肉に満足する人を見て羨ましい。自分はどうあつても女の霊とか魂とかいうか、いわゆるスピリットを攫まなければ満足ができない。それだからどうしても自分には恋愛事件が起らない」  
（略）「おれが霊も魂もいわゆるスピリットも攫まない女と結婚している事だけはたしかだ」

一郎は直との精神的な繋がりを見望しているのである。

四十章では直と二郎が和歌山から和歌の浦へ帰って来る。直が一郎に挨拶をするのだが一郎はそれに応えない。これは一郎が直に対して疑念を持っているからだと考えられる。それに対して、二郎に話しかけられた際にはすぐに答えているので、二郎に対して疑念はないのだろう。

## 第二節 「帰ってから」における一郎の態度

引き続き一郎について考察する。

三章では、一郎はたいがい書斎裡の人間だったために、娘の芳江にあまり懐かれていないことが明かされる。それを重は気に入らず、食事の際に芳江になぜ父のそばに行かないのかという問いをよく投げ掛けた。芳江の答えは一郎にとっては思わしくないものであり、一郎は黙って独り書斎に退くのが常であった。このことから一郎は家族とのコミュニケーションを拒んでいるのではないだろうか。六章で一郎は初めて孤独をあらわす。一郎は貞に結婚すると人間の品格が墮落し、恐ろしい目に会うことすらあると言う。一郎にとつて直との結婚は幸せなものではないということを表している。

七章では食卓で貞の結婚の話をしている。一郎が貞は生まれつきからして直と違うと言う。すると食事を済ませた直は部屋をでていき、一郎はそれを悲しむ。一郎は直に対する配慮が欠けていて、これが直を壊成すことができないということなのである。一郎は直が去ってしばらくすると書斎へ向かう。このような光景を二郎は東京に帰ってからしばしば目撃していた。一郎と直の関係はよくない方向へと進んでいるのである。そして一郎はますます書斎に籠ることになる。直と一郎のコミュニケーションが少なくなっているのは明確であるが、一郎とその他の家族とのコミュニケーションも少なくなっていることが推測される。

二十一章では、父の在り方を批判的にみる一郎をみて、二郎は一郎が親身の親からも離れようとしていて、と考える。一郎は自ら孤独になろうとしているのである。

二十二章で一郎は父も二郎も信用できなくなる。直の気持ちが変わ

からないところから始まったことだが、人間不信に陥っている。この人間不信は直のスピリットが掴めないところに起因していると考えられる。一郎は二郎のことを報告しないために二郎を信用しなくなるのだが、二郎のことを「士人の交わり」の出来ない男と言う。「士人の交わり」とは打算や嘘偽りのない、心と心の交流である。直との心からの交流が望めずに、二郎にそれを求めるのだが不可能だと知った一郎は二郎を罵倒する。口論の末、一郎と二郎の間には深い溝ができる。二郎が一郎の部屋に自分から行っていたのだがそれがなくなり、ますます一郎は孤独になる。

二十六章では、一郎に下宿の挨拶をするために二郎が書斎にいた。その頃、直と芳江が一郎の不断着を持つていくのが習慣になっていた。二郎は一郎の眼付から直たちを待ち設けていたことを覚る。一郎には直の気持ちには分からないが、直が一郎に対して何か働きかけて来るのは、一郎にとつて嬉しいことだった。二郎が家を出ることを告げると、一郎は自分が二郎を家から出したように皆から思われては迷惑だと言う。一郎は自分が非難されることを恐れており、自分のことしか考えていないのである。

二十七章では一郎はパオロとフランチェスカの話もちだす。

「人間の作った夫婦という関係よりも、自然が醸した恋愛の方が、実際神聖だから、それで時を経るに従つて、狭い社会の作った窮屈な道徳を脱ぎ棄てて、大きな自然の法則を嘆美する声だけが、我々の耳を刺戟するように残るのではなからうか。もっともその当時はみんな道徳に加勢する。二人のような関係を不義だと云つて咎める。しかしそれはその事情の起つた瞬間

を治めるための道義に駆られた云わば通り雨のようなもので、あとへ残るのはどうしても青天と白日、すなわちパオロとフランチェスカさ。どうだそうは思わんかね」

一郎にとつて人間の作った夫婦とは見合いによつて結ばれた夫婦で、自然が醸した恋愛とは自由恋愛・自由結婚であり、後者の方が神聖なのだと言う。「狭い社会の作った窮屈な道徳」とは家長制などに沿つた当時の道徳で、「大きな自然の法則」は自然が醸した恋愛である。一郎のなかで人間の作った夫婦は一郎と直であり、二郎と直はパオロとフランチェスカである。そして二郎と直が勝利者となると考える。つまり一郎は直と二郎の両方を疑つていたのである。

三十四章で、貞が嫁に行く前に一郎は大切な話があつたんだと言つて、貞を書斎に招く。直のことは疑うのに、貞を部屋に招き入れる一郎の行動は軽率で自分勝手である。一郎(男)は直(女)の心を手に入れなければならないというのに、一郎(男)は直(女)に心を手に入れさせようとはしない。女は男のモノという認識がみとれる。

### 第三節 「塵勞」における一郎の態度

引き続き「塵勞」における一郎について考察していく。

三十五章でHさんは一郎に神についての話をする。どこの馬の骨だか分からない人間を見てもありがたく感じるのだから、神を崇拜すれば幸せになるのではないかと持ちかける。しかし一郎は自分が崇高だと思ふ人間や、自然こそが神なのだと反論する。Hさんは苦しんでいる一郎をどうにか救いたいと思ひ提案したのだが、一郎に



は自分の基準があり、その他の意見を聞き入れようとしていない。

三十六章でHさんは一郎を山に連れて行く。そこで一郎は百合などを「あれは僕の所有だ」という。さらに森や谷を指さし「あれらも」とごとく僕の所有だ」と言い、Hさんはここで一郎をはじめ不審に思い一郎に質問するのだが、一郎はただ淋しく笑うだけだった。一郎は、直の心がわからずに苦悶し、スピリットを掴まずにはいられないと言っていた。自然はただそこにありのままで存在するものである。邪念のきざす事のない、ありがたいものであると一郎自身が言っている。また、自然は一郎をそのまま受け入れるものであるとも考えられる。のちの塵勞四十三章でHさんは「自然に敵意がない」と評している。だから一郎は山などを自分の所有と云うのである。山を降りる途中で一郎は、突然後からHさんの肩をつかんで、「君の心と僕の心とはいったいどこまで通じていて、どこから離れているのだろう」と聞く。一郎は最初直の心がわからずに悩んでいたが、二郎の心は分かるなどと言っていた。しかし今となっては、一郎は誰の心もわからなくなっている。そのためにHさんにこのような質問を投げかけているのである。Hさんは返答に戸惑い、「Keine Brücke führt von Mensch zu Mensch. (人から人へ掛け渡す橋はない)」と言う。それを聞くと一郎は「自分に誠実でないものは、けっして他人に誠実であり得ない」と言い、そのような態度であるとHさんを評し、朋友としての自分は離れるだけだと告げる。そして一郎は一人Hさんのもとを離れ「Einsamkeit, du meine Heimat Einsamkeit! (孤独なるものよ、汝はわが住居なり)」と言うのである。ここで一郎はHさんとの「士人の交わり」はできないとする。「士人の交わり」ができないのなら自ら孤独を選ぶというよ

うな態度で、孤独の道へと進もうとしているのである。

三十七章でHさんは一郎が社会に立つてのみならず、家庭でも孤独であるという痛ましい自白を聞かされる。一郎はHさんにも疑念を持っているのだが、家庭のものをそれ以上に疑っていた。一郎は最初直の心が分からず、直に対して疑念を抱くようになる。二郎のことを最初は信頼していたのだが、直についての報告をしてくれなかったために信じられなくなる。一郎の孤独の感に堪えないのは、他人が本心では何を考えているのかわからず、心からの意思疎通ができないと感じているからである。そして何を考えているのか分からないというところから、他人が邪念をもって自分に接しているのではないかと考え、誰もかれも疑うようになる。一郎の孤独は直の心の分からないところから始まっているのである。それゆえに一郎にとっては父も母も偽の器なのだが、直はことさらにそう見えるのである。そして一郎はこの前直に手を加えたという。一郎は直が抵抗しないために自分の人格が随落すると苦痛の表情を浮かべながらHさんに話す。なぜそうする経緯に至ったか一郎は明かさない。しかし以前に「噫々女も氣狂にして見なくっちゃ、本体はどうい解らないのかな」(兄十二)という発言をしている。また、「人間は普通の場合には世間の手前とか義理とかで、いくら云いたくつても云えない事がたくさんある」(兄十二)のだが、例えば精神病になれば「胸に浮かんだ事なら何でも構わず露骨に」(兄十二)言うことができ、そういう状態で発せられる言葉は普段自分たちが「口にする好い加減な挨拶よりも遙に誠の籠った純粹のもの」(兄十二)であるのだと言っているのである。つまり一郎は直の言動は本心からきているものではないと感じており(それゆえに直を疑っている)、直の

スピリットを掴むことができない。一郎は直の本音が知りたくて仕方がなく、最初は二郎に節操を試させるという手段をとった。それが失敗に終わり、直の本音を知ることが果たされなかった。それから一郎はテレパシーの実験をするようになる。テレパシーの実験の結果は本文中には描かれていないが成功したとは考えにくい。一郎は最終手段として手を加えるに至ったのである。苦渋の選択だったのである。それゆえ直への暴力を語る一郎は自分の人格が墮落していると言ひ、顔に苦痛の表情を浮かべるのである。直への暴力が日常化していたという指摘もあり、一郎は直を精神病に至らしめて本音を吐露させるつもりだったのかもしれない。直は一郎からの暴力を受けても「レデー」らしく抵抗をしない。また言い争いもしなかった。一郎は結局直の本音を聞き出すことができなかった。つまり直のスピリットを掴むことはできなかったのである。

三十九章で一郎は幸福になるために研究をしていたのだとHさんは語る。一郎の今までの行動を見るに一郎にとつての幸福とは、直のスピリットを掴むこと、言いかえれば直と心を通わせることだったのである。しかし一郎は直と心を通わせることができなかった。そして「何も考えていない人の顔が一番気高い」と評する一郎は、自我が直との心を通わせるための障壁となつてゐることに気づいていたのではないだろうか。

四十章では、Hさんは一郎にモハメッドの話をする。モハメッドは山を呼び寄せてみせると言つたが、結局山はモハメッドのもとへは来ない。するとモハメッドは自ら山の方へ歩いて行くという話である。そしてHさんは一郎に「なぜ山の方へ歩いて行かない」と問い、「君は山を呼び寄せる男だ。呼び寄せて来ないと怒る男だ。地

団太を踏んで口惜しがる男だ。そうして山を悪く批判する事だけを考へる男だ。なぜ山の方へ歩いて行かない」と付け足す。Hさんはモハメッドの話を通して一郎に、何故人に歩み寄ろうとしないのか。一郎は人が自分に歩み寄らない場合には怒り、悔しがる男だ。そうして人を悪く批判する事だけを考へているのだ、ということを保つたいのである。すると一郎は「向うがこつちへ来るべき義務があつたらどうだ」と言う。Hさんはこつちに必要があれば行くと言うが、一郎は「義務のないところに必要のあるはずがない」と主張する。

Hさんは必要のために行きたくないのなら幸福のために行くのだと言う。一郎は「妻直との関係においても愛情の回復を切実に求めてはいるものの、夫としての権利だけ固執して相手への義務を果たさうとしない。だからといって、山と自分との接触の必要性を全く否定しているでもない」エのでHさんの言うことを頭では分かっているのである。しかし自分のこれだと決めた水準を生活の中心としないと生きられない一郎は、エゴを捨てて人に歩み寄ることができないのである。自分のエゴを捨てずに幸福を求めようとすることは矛盾している。

四十四章で、一郎は自らの宗教観について語る。一郎は「神は自己だ」と言う。そして「絶対即相対」について述べる。

兄さんは純粹に心の落ちつきを得た人は、求めないでも自然にこの境地に入れるべきだと云います。一度この境界に入れば天地も万有も、すべての対象というものがごとくなくなつて、ただ自分だけが存在するのだと云います。そうしてその時の自分は有るとも無いとも片のつかないものだと云います。偉

大なようなまた微細なようなものだと言います。何とも名のつけようのないものだと言います。すなわち絶対だと言います。そうしてその絶対を経験している人が、俄然として半鐘の音を聞くとすると、その半鐘の音はすなわち自分だということです。言葉を換えて同じ意味を表わすと、絶対即相対になるのだというのです、したがって自分以外に物を置き他を作って、苦しむ必要がなくなるし、また苦しめられる掛念も起らないのだというのです。

一郎は自我の肥大のために他人と分かり合えず、孤独に陥って苦痛を味わう。この考えは、どうすれば孤独に苦しめられずに済むかと悩みぬいた末のものなのである。しかしこれは現実には不可能なことであり、それを一郎は知っている。一郎は自我を捨てないことを選んだので破滅へと向かって行くのである。

五十一章で一郎は貞について話す。Hさんは一郎に、貞と住めば幸せになれるのではないかと問いかける。しかし一郎は、嫁に行く前の貞と嫁に行ったあとの貞とはまるで違っていて、今の貞は「夫のためにスポイル」されており、スポイルされた女から幸福は要求できないという。そして自分は直のことをどれだけ悪くしたかわからないと告げる。一郎は自分が、また家族が直を抑圧してしまつたために、直の天真が損なわれてしまつたことを認めている。一郎の考え方から明らかなであるが、女から幸福を求めることはするもの、自分から幸福を与えようとはしない。つまり一郎は直から愛されたかと思つていたものの、自分から直のことを愛そうとはしなかつたのである。

### おわりに（終章）

直と一郎の悲劇は、見合いで心と心が結ばれることなく結婚したことに起因していた。直は一郎の腹の中が分ならず、親しみを感じる二郎に心の繋がりを求めるのだが、それも失敗に終わる。そして家庭での自分の保身のために、魂の抜殻として生きて行くこととなる。同じく直の心がわかない一郎は、打算などではなく純粹に二者間の間にある愛着だけで結びついた関係、つまり「ロマンチックラブ」を切望していたのである。直との心と心の結び付きが望めないために、一郎は二郎やHさんに土人の交わりを求めるのだがそれも失敗に終わる。一郎のエゴがそれを邪魔しているのである。つまり、一郎と直のロマンチックラブは最初から望めなかつたものである。一郎がエゴを捨てない限り、心と心の結び付きはいつまで経つても望めない。一郎は孤独地獄に陥り破滅へと向かっていくのである。

### 展望

『行人』では一郎の結末は詳しく描かれていない。一郎はどうなるのだろうか。先行研究では一郎が発狂するという説や直が狂気の一郎に殺され、一郎も自殺するという説などがみられる。

漱石は『行人』執筆後、一九一四年四月二〇日から『ころ』の執筆をはじめた。ここで『行人』の終りと『ころ』の始まりに関連性があるのではないかと考えた。二作品の時空の繋がりがから考察する。

『ころ』は先生と「私」が鎌倉の浜辺で出逢うところから始ま

る。「私は夏季休暇で鎌倉の辺鄙なところにある宿に泊まっていた。個人の別荘がいくつもあり、海がごく近い。先生は別荘のような宿に泊まっていた。先生と「私」が初めて出逢ったとき、西洋人を伴っていた。

ここで、『行人』で一郎とHさんが最後に泊まっていた場所やそこで起きたことについて触れたい。季節は夏、二人は紅が谷の小別荘に泊まっていた。紅が谷は鎌倉である。そこである晩に二人が浜辺を散歩する場面があり、西洋人の別荘が登場する。

両方とも夏という季節で同じ鎌倉であること、浜辺が登場すること、『行人』には西洋人の別荘、『ころ』には西洋人が登場することから、『行人』と『ころ』の時空は繋がっているのではないだろうか。漱石はこのことを意識して執筆したのではないかと思われる。一郎の今後は『行人』には描かれていないが、漱石はそれを『ころ』の先生に持ち越したのではないだろうか。

一郎は自我が肥大し、自分の基準に沿わないものは許さないと  
いう人間である。漱石は一九一四年一月二十五日に学習院輔仁会  
において『私の個人主義』という講演を行っている。そのなかで漱  
石は、

近頃自我とか自覚とか唱えていくら自分の勝手な真似をしても  
構わないという符徴に使うようですが、その中にははなはだ怪  
しいのがたくさんあります。彼らは自分の自我をあくまで尊重  
するような事を云いながら、他人の自我に至っては毫も認めて  
いないのです。

これは一郎のような人物をあらわしている。そして、

個人主義というものは、(略)他の存在を尊敬すると同時に自分  
の存在を尊敬するというのが私の解釈なのですから、立派な主  
義だろうと私は考えているのです。

と述べている。つまり、『行人』は漱石が『私の個人主義』の思想に  
至る過程に描かれた物語なのである。

一 飯田祐子「〈長野家〉の中心としての《母》——『行人』論のために」

（『名古屋大学近代文学研究』第七号 一九八九・一二）

二 脚注一に同じ

三 金泰淵「漱石におけるエゴイズムの問題——『行人』を中心として——」

（『国文学解釈と鑑賞』一九九七・六）

四 田中英「「整った頭」と「乱れた心」——『行人』私論——（佐藤泰正編

『漱石を読む』笠間書院 二〇〇一・四）

五 伊豆利彦「『行人』論の前提」（『日本文学』一九六九・三）

参考文献・資料一覽

テキスト

夏目漱石『行人』（新潮社 一九五二・二）

一次資料

夏目漱石『ころろ』（集英社 二〇〇七・七）

夏目漱石『私の個人主義』（筑摩書房 一九八八・七）

二次資料

飯田祐子「長野家」の中心としての《母》―『行人』論のために―

（『名古屋大学近代文学研究』第七号 一九八九・一二）

金泰淵「漱石におけるエゴイズムの問題―『行人』を中心として―」

（『国文学解釈と鑑賞』一九九七・六）

田中実「整った頭」と「乱れた心」―『行人』私論―（佐藤泰正

編『漱石を読む』笠間書院 二〇〇一・四）

伊豆利彦『行人』論の前提（『日本文学』一九六九・三）